

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	このえ雑色保育園
施設所在地	大田区仲六郷2丁目7-11
法人名	株式会社なないろ

1. 活動のテーマ

<テーマ>

声/音/動きからのアプローチ「食物アレルギー」

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

子ども達を取り巻く環境の実態として、都市型保育園特有の施設構造の制約や、異常気象による活動の規制、近隣公園の混雑等により、体験に必要な環境が多く制限されている。

本園では「食を営む力」を乳幼児期の成長課題の一つとして捉え、「なかよし給食」を取り入れながら、食物アレルギーに対する考え方を保育の中で大切にしてきた。すくわくプログラムの安全計画を作成する中で、子どもたち一人ひとりが、そして友達と一緒に楽しみながら真剣に理解を深められるよう、「食物アレルギーとは何か」「どんな行動が自分やみんなを守るのか」を「声・音・動き」をテーマとして取り入れることにした。専門家と協同で開発・映像化された音や運動のプログラムを通じ、子どもたちの命を守る行動の定着を目指す。

2. 活動スケジュール

8月4日：「アレルギーって何だろう」をグループごとに決め、調べることや手法を話し合う。
9月10日：アレルギーの種類や症状を知るため図書館で本を借り、「調べる」プロセスを体験する。
10月16～11月：映像を用いて「声・音・動きで表現」で表現し、動きを真似ることで探究を深める。
1月16日：映像を通して、「命を守るためにはどう行動するべきか」を探究する。
3月6日：グループごとに食物アレルギーのポスターを制作し、他者への発信を行う。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・人：グループ活動において子どもの疑問にすぐに対応できるよう、1グループに1名の保育者を配置。また、専門職（給食担当）職員2名がサポートに入る体制を整えた。
- ・物：映像による表現素材、ポスター制作のための画用紙やマーカー等。
- ・場所：六郷図書館、保育室

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

食物アレルギーに対し、子どもたちが興味を持ちやすく、楽しく身に付けられるよう、音と運動を用いた活動を日常の保育（給食時など）に取り入れた。耳から覚えて声に出し、身体で表現する実践を通して、どのように自分やみんなを守っていくのかを考え、気付けるよなストーリー性のある保育環境を設定した。

話し合い：食物アレルギーとは何か、意見を出し合い自分の言葉で伝える経験。

調べる体験：食物アレルギーに対する「どんな症状？」という問いから、実際に図書館へ行き「調べる」プロセスを体験。

表現の体験：映像に合わせて音やリズムを真似ることで探究を深める。

命を守る探究：映像の言葉から「自分を守る、みんなの命を守る」ための具体的な行動を探究。

ポスター制作：みんなに周知するために「話し合う」体験を重ね、意欲を形にする探究活動。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

「食物アレルギー」という言葉に対し、クラス内で関わりがある「卵や乳」についてはすぐに声が上がった。数名が「パパやママが〇〇食べられないって言っていた」と発言したことをきっかけに、グループ間で次々に食材や料理名が出てきた。そのやり取りの中で症状について話す子どもおり、新たな問いへと繋がった。

症状について「図書館で調べてみたい」という声上がり、実際に図書館へ行くと、子ども一人ひとりが真剣に本を探し、「あった、これで調べられる」と意欲的な発言が見られた。症状について話し合う中で、「どうしたら防げるのか」と疑問を抱く子ども現れた。

映像を用いた活動では、音やリズムに合わせて身体を動かしながら真似ることで、アレルギーの症状や命の守り方を楽しく吸収していた。日々の給食前などに映像を流すことで自然と口ずさむようになり、より身近なものとして捉える姿が見られた。

音・声・動きを通した学びから、「手洗いをしないといけないだね」「顔が赤いお友達がいたら、先生をすぐ呼ぶんだよ」など、積極的な話し合いができた。その中で、「私たちだけが知っているもだめだね」という声上がり、次の探究へと繋がった。

子どもたちから生まれた「みんなに周知するためにはどうしたらいいの」という疑問をもとに話し合いを行い、ポスター制作へと発展した。何を伝えるべきか意見を交わしながら、グループで協力して取り組む姿が見られた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

「食物アレルギー」というテーマはどうしても難しく考えてしまいがちだが、「音・声・動き」という日々の保育で親しんでいるものからアプローチすることで、子どもたち自身が想像以上に深く考え、答えを出導き出す姿が多く見られた。興味や意欲をどのようにして保育に落とししていくか、その重要性に改めて気付かされた。

疑問に思ったことを調べ、話し合い、そこから得た気づきや発見から更なる疑問を見つけ、保育者が環境をデザインしていくことは容易ではなかったが、この「サイクル」こそが探求であるということを、本プログラムを通して深く学ぶことができた。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	このえ雑色保育園
施設所在地	大田区仲六郷2丁目7-11
法人名	株式会社なないろ

1. 活動のテーマ

<テーマ>

声・音・動きからのアプローチ「基礎運動」

<テーマの設定理由>

本園では、子どもたちが自ら考え、行動し、経験を重ねる主体的なプロセスを大切にしている。この活動では、幼児期に必要な「多様な動き」を無理なく身に付けられるよう、子どもたちの関心を引く「動物の模倣」を取り入れた運動遊び（基礎運動）を開発・導入した。

動きのポイントを視覚的に示した「イラストガイドブック」を活用することで、子どもたちが「どうやって動けばいいかな？」と試行錯誤しながら、単に身体を動かすだけでなく、絵本のように見て考え、自分の身体の使い方や機能への理解を深めることを目指している。また、このガイドブックは、乳幼児期の身体的成長の重要性を広く知ってもらい、園だけでなく家庭や地域とも連携して子どもの成長を支えるきっかけとすることを目的として、本テーマを設定した。

2. 活動スケジュール

いつもの基礎運動の時間に、保育者が手本を見せるだけでなく、イラストガイドブックを提示する。そのガイドブックを保護者とも共有し、いつでもどこでも身体を動かせるきっかけづくりを行う。

ガイドブックの絵と自分の身体の動かし方の違いや、「どこを動かせば綺麗な形になるのか」を考え、問いながら、子ども自身が気付いたり互いに伝え合ったりして、正しいフォームを形成していく。

そこから身体を使った遊びへの問いかけを行い、子どもたち自身が考え、遊びを発展させていく。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・人：グループ活動において子どもの疑問にすぐに対応できるよう、1グループに1名の保育者を配置した。
- ・物：体操着、基礎運動のイラストガイドブック
- ・場所：保育室。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

日々の保育における基礎運動による実践。
イラストガイドブックを用いた身体の使い方の探究。
遊びを通じた身体の使い方の探究（綱引き等の展開）
運動会等の行事における成果の披露。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

日々の基礎運動の中で、身体の使い方や重要になるポイントなどを子どもたち同士で教えあう姿が見られた。繰り返し実践した経験から自信を持ち、自ら積極的に身体を動かす姿があった。

イラストガイドブックを使用したことで視覚からも情報が入り、「ここ（腕や足）を伸ばすんだよ」などと意見を交わしながら、一つひとつの動きを丁寧に行う姿が見られた。

「腕の力を使った遊びって何があるか」を考える中で、「綱引きが面白そう」「どうしたら引っ張れるかな」と疑問を持ち、実際に遊びながら「こうしたら力強く引っ張れる！」といった気付きや発見を喜んでいた。

保育で実践している遊びを「運動会でもやってみたい」という声上がり、紅白戦の出し物として子どもたち自身で考え、それを披露することで大きな達成感と充実した表情が見られた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

基礎運動を日々の保育の中で落とし込むことで、子どもたち自身が「できるようになった」という自信や、「どうしたらできるようになるか」を考える貴重な経験を積むことができた。また、イラストガイドブックを用いたことで視覚からの情報が分かりやすくなり、言葉だけでは伝わりづらい動きのポイントも、「見て学ぶ、気づく」ことができるようになった。

そこから遊びをどう発展させていくかについても、子どもたちの発言を大切に拾い上げることで、より意欲的に取り組むようになり、遊びの中で互いに考え、探究しながら「勝つ方法」や「力を入れる場所」を見つけ出す姿に成長を感じた。年齢に応じ、意識的にこうした活動を継続し記録を重ねていくことが、保育者の質の向上や学びに繋がり、子どもの健やかな発達に不可欠なプロセスであると改めて気付かされた。